

後宮の料理妃
霊獣の巫女と神龍の皇帝

及川 桜 Sakura Oikawa



アルファポリス文庫

目次

序章	拉致される花嫁	5
第一章	饕餮 <small>とうてつ</small> の巫女	7
第二章	怪力女の興入れ <small>こじい</small>	64
第三章	饗 <small>き</small> 宮房 <small>ようぐうぼう</small> の料理人	127
第四章	後宮の悪妃	163
第五章	闇の記憶	190
第六章	饕餮襲来	216
第七章	刻限 <small>くくげん</small> の味	277
終章	甘露 <small>かんろ</small> の迎え人	301

序章 拉致される花嫁

皇帝からの求婚に抗える者などいない。

しかも、舜殷国皇帝劉赫は、誰も見惚れるほど見目麗しく、武術にも長けている。年頃の女であれば、自身の上に突然降りかかってきた幸運に、涙を流して喜びそうなものだが、潘雪蓉だけは違った。

「お断りよ！」

あろうことか、皇帝からの求婚を本人の前ではっきりと切り捨てたのだ。

「お前、自分がなにを言っているのかわかっているのか？」

漆黒の駿馬に跨り、雪蓉を見下ろしながら劉赫が言った。淡々とした口調だが、明らかに怒っている。

「ええ、十分理解しているわ。妃になんて絶対にならない！」

雪蓉という女人は、天女が舞い降りたかのように可憐で美しいが、口が相当悪い。

見た目に騙されて求婚し、撃沈した男は数知れず——だ。

雪蓉の無礼な態度に、武官たちがざわつく。皇帝にこのような口をきいたら、不敬罪で捕らえるのがしきたりだ。だが劉赫は、怒る武官たちを鎮め、やけに慣れた様子で雪蓉の暴言を聞き流す。

「お前の言い分はわかった」

感情の起伏を見せず、劉赫は冷静に言う。

「わかってくれたみたいで良かったわ」

案外聞き分けが良かったことに、雪蓉はほっと胸をなで下ろす。しかし——

「捕獲しろ」

劉赫の口から出た思わぬ言葉に、雪蓉は目を丸くする。

「ほ、捕獲!？」

動物じゃあるまいし、と言いかけたところで、武官たちが雪蓉を取り囲む。

「待ちなさいよ、こんなの人権侵害よ！ 卑怯者、鬼畜、人でなし！ それと、ええと……甘えん坊！」

やけになった雪蓉は思い浮かぶあらゆる悪口を並べ立て、武官に囲まれながら叫ぶ。妃になるくらいなら、不敬罪で処罰される方がましだ。

「それを言うなら甘党だ」

眉間に皺を寄せ、心底不服そうに劉赫が訂正する。他の罵詈雑言はまったく気にしていないようだが、甘えん坊は別らしい。

「私は絶対、妃なんかにならない……から……ね——！」

雪蓉の叫びの言葉尻は、武官たちに押さえ込まれ、儼く消えていったのだった。

第一章 饕餮の巫女

へきてん
碧天が広がる暖かな太陽の下、黄土色に輝く地面の上に、一人佇む美少女がいた。陽にすかすと濃紫色が浮き出る柔らかな長い黒髪は、腰元まで届いている。雪のよう
うに白い肌を持ち、まるで丹花が開いたかのような紅く艶やかな唇。長い睫毛に縁ど
られた瞳は深い瑠璃色で、さながら大きな宝珠のようだ。歳は十八で、花盛りの瑞々
しい輝きを放っている。

そして、簡素な藍色の漢服を纏い、遠い空を物憂げに見上げる様は、ため息が出るほど美しい。

解語之花と形容されるほど美しい雪蓉は、強風が吹けばたちまち倒れてしまいそうな、可憐な物言う花に見えた。

彼女は集中するように深く息を吸い込むと、おもむろに大きな鍬を頭上に持ち上げた。

「でえいつー！」

華奢な体のどこからそんな野太い声が出たのか、およそ乙女には相応しくない勇ましい掛け声と共に、雪蓉は鉄製の鍬を振り下ろし、土に突き刺した。そして凄まじい速さで鍬を振り下ろしては土を耕し、あつという間に耕耘された畑が出来上がった。遠くから雪蓉の様子を見守っていた小さな巫女仲間たちが、そつと囁き合う。

「相変わらず凄いな」

「大人しくさえていれば、豪族に嫁げるくらいの美人なのに」

「無理だよ。この前も雪姐を見て一目惚れした村の若頭が口説きに來たけど、鍬で追いついてたもの」

七、八歳ほどの小さな巫女たちは、妙齡である雪蓉の嫁ぎ先を心配して、大きなため息を吐いた。巫女とはいっても、一生巫女であり続けなければいけない縛りはない年頃になれば結婚し、この土地を去るのが一般的だ。しかし、村一番の美人である雪

蓉が最も結婚が難しいと彼女たちは憂えている。

子どもに心配されているくらいだから、本人はさぞや気を揉んでいるだろうと思いきや、雪蓉は実にあっけらかんとしていた。『私、結婚する気なんて毛頭ないわ！』というのが彼女の口癖で、一生独身を貫く覚悟を決めている。

雪蓉は貧しい農村の家に生まれた。幼い頃に疫病で母を亡くしたが、頼れる身内もなく男手一つで雪蓉を育てていくことは困難だったのだろう。このままでは父子共々餓死すると先を案じた父は、山奥の四凶の地の一つ、饕餮山と呼ばれる集落に雪蓉を残し、姿を消した。

そこは別名〈子捨て山〉と呼ばれる、四凶の饕餮を鎮める仙の住む聖域だった。四凶とは、饕餮、窮奇、檮杌、混沌と呼ばれる四匹の霊獣のことである。各々山に住み、その近くには彼らを鎮める仙と巫女が住む。饕餮山に捨てられた子どもは、饕餮を鎮める仙の手伝いをする巫女となるのだ。

饕餮という怖ろしい霊獣の側で生活することになるが、衣食住は確保され、とりあえず死ぬことはない。嫌になったら、いつだって出て行ってい。ただ、親から捨てられた子どもに行き先などないので、ほとんどが子ども時代をここで過ごす。

その中で、食料や生活用品を買うために麓の村に行くことがある。そこで出会っ

た村人と恋仲となり、結婚して出て行くことが彼女たちの最大の目標だ。だから、子どもとはいっても結婚の話題には敏感なのである。

「お待たせ！ さあ、帰りましょう」

大きな鎌を肩に担ぎながら、雪蓉は小さな巫女たちのもとへ戻ってきた。現在、巫女は雪蓉を入れて五人。いずれも親から捨てられた子どもたちだ。

様々な家庭の事情はあるが、妓楼などに売られる子どもも多くいる中で、饕餮の巫女になったことを不幸と感じる者はいない。同じような境遇の者同士が身を寄せ合い、助け合って家族のように生活している。最初は泣き暮らしていた子ども笑顔になっていく——ここはそんな温かな場所だ。

畑仕事を終え、背負い籠の中に収穫した野菜を山盛りに入れて、雪蓉たちは家へと戻った。

自分たちしか住んでいないこの土地はとても広く、建物も多かった。鶏小屋に、豚小屋と牛小屋、仙の居宅、巫女たちが眠る家屋、それに厠や風呂場など、全てが独立した建物になっている。

饕餮を鎮めるために国からは税が支給されているので、住まいはわりと快適だ。

彼女たちは真っ直ぐに厨房専用の屋舎へと入ると、手際よく作業を始める。小さな

巫女のうち、ひとりが石のすり鉢を押さえ、もうひとりが石のすりこぎを持って、香草と木の実をすり潰し始めた。

巫女の一歩の務めは、饕餮に捧げる料理作りだ。

饕餮とは、悪神と呼ばれる四凶の一つで、暴食の化身である。ひとたび地に放たれば、永遠に食べ続ける。人や動物、魚や虫、植物など手当たり次第に貪り続け、その欲望はとどまるところを知らない。

そんな怖ろしい霊獣を鎮めるのが仙と呼ばれる者だ。仙は、山中に入り修行を極め、神変自在の術を得た者のことをいう。仙は食べ物に術をかけ、満腹を知らぬ饕餮の腹を満たすことができるのだ。

巫女が食べ物を調理し、それに仙が術をかける——そうやって饕餮を鎮め続けてきたのである。

「さあ、始めるわよ」

雪蓉は、竈の上に置かれた鼎に水と香草を放り込んで、薪を燃やし始めた。

五歳の時にこの地に捨てられ巫女となり、早いもので十三年となる。最初は包丁を持つことさえ危うかった少女が、今では立派な料理人となった。

畑仕事も、鶏や豚を屠殺するのもお手のものだが、一番得意で大好きな仕事は料理

だ。料理を極めて仙になる——これが彼女の夢であり目標だった。仙を継ぎ、身よりのない子どもたちを育てたい。だから雪蓉は結婚する気など毛頭ない。

最後に仙が術をかけるとはいっても、料理の出来は霊獣への術のかかりやすさに比例する。心のこもった美味^{おい}しい料理を作れば少ない量でも満足してくれるが、出来の悪いものだと術が効きにくい。仙に言わせれば、技術が未熟な雪蓉たちは大量に料理を作らなければならないとのことだった。

「できたわ」

雪蓉は額^{ひたい}の汗を布で拭って言った。

「美味^{おい}しそう」

「さすが雪姐」

小さな巫女たちは大量の料理を見ながら、生唾を呑み込んだ。

大皿に山盛りになった青菜と春野菜の炒め物、豚の皮付きの三枚肉を少し甘めの濃厚な汁で蒸した一品に、山菜の衣揚げや塩味の豆花^{ドゥファ}を浮かべた鶏の澄まし湯など十人以上はある。

「あなたたちも手伝ってくれたじゃない」

褒められた雪蓉は、少し照れくさそうに言った。

「そうけど……」

雪蓉を除く巫女たちは、まだ小さいのでたいしたことはできない。早く雪蓉の役に立ちたいと思っているが、料理人としてはまだまだ未熟だ。

「さあ、冷めないうちに料理に術をかけてもらいに行きましょう」

そう言って雪蓉は、大皿に積まれた皮付き豚の甘煮を持ち上げた。

「はい！」

少女たちの可愛らしい声が厨房に響き渡る。

仙の住む居宅の玄関の扉を開け、小さな巫女が声をかけた。

「仙婆、できたよ」

仙婆と呼ばれた老婆は、奥の間から腰を屈めてのろのろと出てきた。

綿毛のような白い髪を後ろで一つに結び、顔も手も皺^{しわ}くちゃだ。

仙が作れば、たった一品でも饗養が満足する料理になるらしいのだが、高齢なのを理由にめったに料理を作ることはない。いつも腰が痛いだの足が痛いだの言って、ほとんど居宅から出ないのだ。

噂では、仙が馬よりも速く山を駆け上がる姿を見たとか、木の枝に飛び移る姿を見たとか言われているが、真偽は不明である。

「どれどれ」

一品ずつ仙が味見をしていく。雪蓉にとっては緊張の瞬間だが、小さな巫女たちは気楽にしている。雪蓉の作る料理はとても美味^{おい}しいと知っているからだ。

「うん、まあいいだろう」

褒められはしなかったが合格したようなので、雪蓉はほっと安堵した。

八年前に、雪蓉の姉代わりだった巫女がお嫁に行つてからというもの、当時十歳だった雪蓉が年長者となり、料理を一手に引き受けることとなった。最初の頃は駄目出しばかりで、泣きながら一日中料理をしていたものだ。

厳しい指導に耐えた甲斐あって、今では誰よりも美味^{おい}しい料理を作れるようになった。

大皿に盛られた大量の料理に、仙がそつと手をかざす。すると、皺^{しわ}だらけの手の平から、淡い茜色の光が料理に降り注がれていく。

「いつ見ても綺麗」

ほうとため息を吐くように、小さな巫女たちはうつとりとその光を見つめる。

幼き頃の雪蓉も、仙の術に見惚れたものだ。だが、今は羨望の眼差しを向けるだけではなく、自分もいつかこの術を会得するのだと大志を抱いた目で見つめているのだ。

無事、仙から料理に術をかけてもらった雪蓉たちは、今度はそれを抱え山奥へ入つていった。

居宅から徒歩五分ほどの場所に、饗饗^{きょうきょう}が住む洞窟がある。巨大な黒い洞窟の中に入ると、しめ縄で奥へ進む道が塞がれている。しめ縄には結界が厳重に張られており、饗饗は外に出られなくなっているのだ。

饗饗のしめ縄には、佩玉^{はいぎよく}が飾られていた。通常、佩玉は高貴な者が身分を示すた

めに腰帯に垂らす装身具だが、平民も真似して装飾品として身に着ける風習がある。

饗饗のしめ縄に飾られているものは、本物の佩玉ではなく、玩具のような安物だ。白い玉板に、小さな青碧色の琅玕^{ろうかん}を模した硝子細工がついている。なぜ饗饗のしめ縄に佩玉が飾られているのかは不明だが、饗饗が封じられた際につけられたらしい。

真つ暗な洞窟の奥からは、不気味な重低音が聞こえてくる。饗饗のいびきだ。饗饗は食事時以外、めったに起きてこない。だから、雪蓉は十三年間毎日この洞窟に通っているが、はっきりと姿を見たことはなかった。

人間には結界がきかないので、出入りすることは自由だ。だが、しめ縄の中に入つたが最後、饗饗は匂いを嗅ぎつけ、頭からひと息に喰らうだろう。

手を入れることも危険なので、指叉^{サスマ}で食事をしめ縄の中に押し込む。全てを入れ終

わり、雪蓉はほっと息を吐いた。

「雪姐、早く行こう」

雪蓉の袖を引っ張りながら、小さな巫女たちは怯えた眼差しで見上げてくる。いくら饗餐がしめ縄の外には出てこれないかわかっていても、怖いのだ。慣れている雪蓉でさえ、洞窟の中に入ると独特の緊張感に包まれる。

「ええ、そうね。早く出ましよう」

不意に、いびきの音が止まる。饗餐が料理の匂いに気がついたのだ。

雪蓉はしめ縄に背を向け、小走りで外へと向かう。その隣を、小さな巫女たちが全力で走っていく。

背後が気になりそっと振り向くと、闇の奥に光る二つの目が見えた。小さな玉石のような目が、雪蓉を捉える。

ぞくりと背筋が凍りつく。体が動かない。

すると、小さな目に不釣り合いなほど大きな口が開いた。四本の大きな鋭い犬歯と、歯に絡まった唾液が糸を引き、闇の中で白く光る。その口は、雪蓉の身長ほどの大きさがあった。

あまりの巨大さに、「ひっ」と短い悲鳴を漏らし、雪蓉は逃げるように洞窟を出る。

明るい日差しを浴びて、ようやく身の安全を感じた。

「雪姐、大丈夫？」

息を荒らげている雪蓉を見上げ、小さな巫女が心配そうに尋ねる。

「ええ、大丈夫。何でもないわ」

小さな巫女の頭をなでて、笑顔を向ける。けれど、心臓は早鐘を打つように鳴り続けていた。あの大きな口に吞み込まれたら、まず助からないだろう。雪蓉は自分が饗餐に喰われる姿を想像して、身震いした。

そうして巫女としての仕事を終えた雪蓉たちだったが、まだゆっくり休めるわけではない。小さな巫女たちに豚や牛の世話を任せ、雪蓉は洗濯しに川へ向かった。

もちろん井戸はあるのだが、井戸水は貴重なので川の水を使っている。

川へ行くまでいいが、水を含んで重くなった衣類が入った竹籠を担いで山を登るのは大変な肉体労働だ。しかし、雪蓉はもう慣れたものだった。

川原に着いた雪蓉は、竹籠を小石が敷き詰められた地面に置いた。

水の流れはたわむれに鮎石の光を浮かび上がらせ、日の光が差し込んだ川原の石は暖を取っているかのようだ。空を見上げると、一面の青空に箒で掃いたような繊細状の白い雲が流れていた。

額にうっすらと浮かび上がった汗を布で拭き、ふと蛇行している川を見ると、大きな黒い物体が打ち上げられていた。

「熊かしら。やったわ、今日は熊鍋よ！」

動かないので死んでいると思った雪蓉は、沸き立つような嬉しさを顔に浮かべた。いかに雪蓉とて、熊を倒すことは難しい。それが死んだ状態で手に入るのだから、鴨が葱を背負ってくるような状況といえる。

弾むような足取りで近づいた雪蓉だったが、やがてお目当てのものが熊ではないことに気がついた。黒く汚れているが、服を着ていたのである。

「嘘！ 人間!？」

慌てて駆け寄ってみれば、横たわっていたのは酷い怪我を負った男だった。うつ伏せで倒れていたので仰向けにさせると、青白い顔が現れた。

衣は傷み、ところどころ破けていて、ついた血が乾いたのか赤黒く染まっている。

黒髪は乱れ、わかめのように顔にへばりついている。

川原に打ち上げられて数時間は経っているのか、服も髪もほとんど乾いていた。

なんて痛ましい。遺体をこのままにしておくことはできないので、どうやって供養するか考えあぐねていたところ、男の胸が小さく上下に動いているのに目が向いた。

（生きている！）

男の口元に頬を寄せると、かすかに吐息が感じられた。

こんな状態で生きていることなんて奇跡だ。雪蓉は覚悟を決めて男を背負った。ずしりと肩に重さが食い込む。

生きているなら助けなくては。人として見殺しにすることはできない。

雪蓉は男の足を引きずるようにして、山を一步一步登り始めた。

誰にも見つからないように注意深く辺りを見回しながら、雪蓉は牛舎の納屋に男を入れた。そして新藁が敷き詰められた上に、男をそつと寝かせる。

（こんなところに匿うことしかできなくて申し訳ないとは思っけれど、饕餮山は男子禁制の場。誰かに見つかるわけにはいかないのよ）

雪蓉は安心したように深く眠り込む男に、心の中で詫言を入れた。

さて、これからどうしようか。医者に診てもらいたいけれど、いかなる理由があろうとも、官吏の許可がなければ男は入山できない決まりだ。発覚すれば厳しい処罰が下される。たとえ、川を流されてきたとしてもそれは変わらない。お役所仕事なので融通は利かないのだ。

とはいえ、雪蓉の父のように、子を仙に預けるために饕餮山に登る者もいるし、巫女を口説きに来る男もいる。官吏に発覚すれば大変なことになるが、誰にも知られなければ問題ない。

医者には診せられないので、とりあえず雪蓉ができる範囲の手当をしてあげようと体を見ると、全身傷だらけで痛々しかった。

もったも重い怪我は足首だろう。赤黒く腫れ上がっていて、もしかしたら骨折しているかもしれない。せめて腫れだけでも引くようにと、雪蓉は男の足に薬草をすり潰したものを塗ってあげる。

他の場所にも塗っていたら、手持ちの塗り薬があつという間に底をついた。新たに薬を作らなければならない。雪蓉は石のすり鉢に薬草を入れ、すりこぎで押し潰す。それを傷口にたっぷり塗布する。これの繰り返しだった。

薬草の知識は仙から教わった。饕餮山は集落から離れていて簡単に医者に診てもらえないので、病氣や怪我をした場合は自分たちで治療するからだ。

(私にできることはこのくらいしかないわ)

あとは、男の生命力に賭けるしかない。

歳は十代後半から二十代前半くらいだろうか。顔は汚れている上、固く目が閉ざさ

れているので、正確にはよくわからない。細身ではあるが筋肉質な体なので、体力はありそうだ。

(きつと大丈夫)

雪蓉は自分に言い聞かせるように心の中で呟く。

それから、男は昏々と眠り続けた。途中、急に高熱を出して苦しみ出したので死んでしまうかと思ったが、男は持ち直した。

生葉をすり潰した塗り薬は乾くと効能が薄れるので、頻繁に塗り直さなければいけないので忙しい。

日中は男のことが気になって仕方がなかった。仙や小さな巫女たちに男の存在を告げることはできなかったので、普段の生活をしながら男の様子を見に行くのは難儀だった。

(どうか、生きて)

雪蓉の願いが届いたのか、男は三日三晩眠り続け、そしてようやく瞼を上げた。

朦朧としているのか、男は二、三度目を瞬かせると、大きく息を吐き出した。

雪蓉は驚いたあと、体の芯から安堵したように力が抜ける。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、あえていつもの口調で声をかけた。

「あら、やっと起きたのね」

喜びを全面に押し出すのも違うだろうと思った。男は赤の他人で、行きがかり上、助けたにすぎない。良くなったら、さっさと出て行ってもらわねば困るのだ。

男が声に気がつき、顔を横に向ける。視線が合うと、男は希少なものを見つけたかのように驚きの表情を浮かべた。

「あなた、三日三晩高熱を出して寝続いていたのよ」

「お前が助けてくれたのか？」

「まあね。川原で横たわっていたから、ここまで運んできたの。あつ、牛舎の納屋で寝かせていたのは悪いと思っているわ。でも、仕方なかったのよ。ここは男子禁制で男を運んできたなんて知られたら怒られちゃうから。牛舎の納屋とはいっても、牛の餌の乾草をしまっている場所だし、別に臭くないでしょ？」

雪蓉が説明する中、男は納屋の中を見渡していた。そして、状況を理解したのか、起き上がりとする。

「すまなかった。あとで礼はする。……痛っ」

上半身を起こした男は足に痛みが走ったのか、体の動きを止めて苦痛に顔を歪ませた。

「なにやっているのよ！ まだ寝てなさい。足はたぶん骨折しているだろうから、しばらく歩けないわよ」

「それは困る。早く戻らねばならない」

「困るって言ったって、仕方ないでしょ。死にかけていたのだから、もう少し体力が回復してからじゃないと帰れないわよ」

せつかく治りかかっているのに無茶をしようとする男に対して、つつい口調がきつくなる。

男は雪蓉に強く言われたことに驚いたあと、言い返したそうに口を開いた。しかし、助けてもらった負い目があるのだろう、落ち着いた口調で話す。

「仕方ない。もう少し、世話になる」

素直に引き下がったので、雪蓉は安心して笑みを浮かべた。男を責めたいわけではない。ただ、心配なだけだ。

すると、男は雪蓉の微笑みに目を大きく見開いた。

「そういえば、あんたって凄いい回復力ね。傷も深かったのに、どんどん治っていった——まるで、人間じゃないみたい」

雪蓉が悪気なく放った一言に、男は絶句し、固まった。

雪蓉は慌てて「やだ、冗談よ！」とバシバシ腕を叩く。
「痛い」

男は眉を寄せ、小さな声で抗議する。しかし、雪蓉は口を大きく開けて笑ったままだ。

こう見えて、雪蓉は浮足立っていた。死んでしまうかもしれないと思った男が目覚め、会話できるまでに回復したことが嬉しくて仕方がない。

「ねえ、どうしてあんな傷を負っていたの？ あれは川で流されてできたような傷じゃなかったわ」

雪蓉の問いに、男は目線を逸らして口を噤む。

それを見て、「言いたくないなら、言わなくてもいいけど」と雪蓉はあっさりと引き下がる。

男がわけありなのは明らかだった。そうでなければ、あんなところで倒れているはずがない。助けてもらったとはいえ、話す義理はないと判断するのは当然だ。

「それよりも、お腹空いている？ なにか食べられそう？」

「食べようと思えば……」

「なによそれ。まあいいわ。待っていて、今作ってくるから」

雪蓉が納屋を出ると、空が茜色に染まり始めていた。

厨房専用の屋舎に着くと、すぐに竈かまどに火をつける。そして、猛烈な勢いで野菜を切っていく。

顔が綻んでいるのが自分でもわかる。目覚めた時、本当は泣き出しそうなくらい感極まっていた。三日三晩、必死でお世話をしたのだから。

でも、早く出て行ってもらわなければ困るのも事実なので、過度に介入せず一定の距離を保たねばならない。

それに、余計な勘違いをされても困る。たしかに男子禁制の掟おきてを破ってまで男を助け匿かくまってはいるが、それは大怪我をしていたからである。命を助けるのは、人として当然のことだ。

あまり仲良くなりすぎないようにと自戒する代わりに、雪蓉は心を込めて料理を作る。早く怪我が完全に治りますようにと願いながら。

仙や小さな巫女たちの夕飯も作らなければいけないので、急いで仕上げた。それに、暗くなる前に届けたい。

お盆に小さな土鍋を載せて、仙や小さな巫女たちがいないか確認してから厨房を出る。そして、見つからないように注意しながら納屋へと走った。

雪蓉が納屋に入ると、横になっていた男が、ゆっくりと上半身だけ起き上がった。眠り込んでいる男の顔ばかり見ていたので、目を開けるとまた雰囲気が変わることに驚く。汚れているのではっきりとはわからないが、整った美麗な顔立ちをしているようだ。

雪蓉はお盆を地面に置き、蓋を開けた。

温かな湯気の奥には、柔らかに煮込んだ米と野菜が入っている。米が輝き、緑の茎や葉が彩りを添えている。

土鍋の中を見た男が、ごくりと唾を呑み込んだ音が聞こえた。

雪蓉は土鍋からお椀に少量よそい、ふうふうと息を吹きかける。そして、匙ですくったお粥を男の口へ運ぶ。まだ満足に手を動かせないからだ。

男はゆっくりと咀嚼した。しばらく舌の上で味わうと、大きく目を見張る。

「味がする」

「そりやそうでしょう。残っていた豚足で出汁をとったの。しっかり下処理しているから、臭みもないでしょ」

男は静かに頷き、口の中で十分に味わったあと、お粥を呑み込む。

「もつとくれ」

「はいはい、熱いからゆっくりね」

男は全てを平らげると、急激に眠気が襲ってきたのか、瞼が閉じそうになっている。必死に眠気を堪えている姿が可愛らしい。

無事食事がとれたこと、味に満足してくれたことに、雪蓉は安心して目を細める。

「じゃあ、ゆっくり寝るのよ。また明日」

雪蓉がそう言うと、男は横になって睡魔に引つ張られるように眠りに落ちた。小さく寝息を立てながら眠る男の顔を見て、雪蓉は自然と頬を緩める。

（寝ている顔はあどけないのね。目を開けていると意外と男らしくて驚いたわ）

男はおそらく、雪蓉よりも年上だろう。耳に心地いい重低音の声だった。

早く良くなつてほしいけれど、離れるのが少し寂しく感じる。ずっと介抱していたから情が移ってしまったのかもしれない。怪我が治り、男が山を下りれば、もう二度と会うことはないだろう。

それでいいのだと自分に言い聞かせ、雪蓉は納屋から出て扉を閉めた。

次の日、朝食を作ってきた雪蓉は、男がまだ寝ているかもしれないことを考え、音を立てないようにゆっくりと扉を開けた。

すると、男は納屋の端の方で、まるで気配を消すように膝を立てて座っていた。「もう起きていたの？ おはよう。その顔色を見ると、よく眠れたみたいね」

男は声を出さずに頷く。まるで警戒心の強い野良犬のようだ。

「朝食を持ってきたわ」

雪蓉がお盆を床に置くと、男はおずおずと近づいてくる。その姿に頬が緩む。

白い湯気を立てる井の中には、ふわふわの雲呑と鶏肉と野菜、それらに隠れるように半透明の米麺が入っている。

男は顔を輝かせながら、背筋を伸ばして井を持った。そして、綺麗な所作で米麺を吸う。

とても品の良い食べ方なので驚いた。衣は酷く汚れて傷んでいるが、育ちがいいのかもしれない。

男は雲呑も頬張ると、蕩けるように目を細めた。

「これが、旨みのある深い味というもののなか」

男が感心したように井を見つめながら呟くので、雪蓉は呆れて言った。

「随分遠回しな褒め方ね」

男は無我夢中といった様子で麺を吸う。それでもがさつな食べ方ではなく、見てい

て清々しい様だった。それだけ味を気に入ったのかと、雪蓉は満更でもない顔で男を見つめる。

「昨日は起き上がることができなかったのに、今日は自力で起き上がれるのね。本当に凄い回復力」

雪蓉は感心して呟く。

しかも、米麺をあつという間に平らげてしまった。次はもっと量を増やそうと心に決める。

男は井をお盆に戻すと、顔を上げて雪蓉を見据える。

「ここはどこだ？」

男の問いに、詳しく話していなかったことに気づく。昨日は彼が目覚めたことが嬉しくて、今いる場所を説明するのを忘れていた。

「ここは四凶の地の一つ、饕餮の住む山よ。私は饕餮を鎮める巫女なの」

「饕餮山……ああ、だから男子禁制なのか。饕餮の巫女と言ったが、お前は親に捨てられたのか？」

「あんた、はつきり言うわね。普通はそういうことを心の中で思っても聞かないものよ。……って、これ、私がよく人に言われることだね」

「だろうな。お前は失礼なことを平気で言いそうだ」

「助けてもらった分際によく言うわね！」

雪蓉の物言いに男が面食らったような顔をしたので、はっとして口を噤んだ。

（しまった、いつもの癖が出てしまったわ）

決まりの悪さを感じながらも、今さら女性らしく振る舞っても仕方ないので開き直る。

気を取り直して、雪蓉は桶に入った水で布を濡らすと、それでぞんざいに男の顔を拭き始めた。

「おい、なにをする！」

「真つ黒に汚れた顔を拭いてあげているだけじゃない」

「それにしたって、もつと拭き方というものがあるだろう。床にこびりついた汚れを落とすように力強く拭くやつがあるか！」

「顔の切り傷に塗っていた薬が乾燥して固まってしまったから、これくらい力を入れないと取れないのよ」

「い、痛い！ いいから、自分で拭く！」

雪蓉から布を取り上げて、男は顔を拭いた。

顔についた汚れと共に、わかめのように顔にへばりついた髪の毛も拭く。前髪の上がつた男の顔を見て、雪蓉は驚きを隠せなかった。

もつと整った顔立ちをしているなとは思っていた。長い睫毛に、真つ直ぐに伸びた鼻梁。まともな身なりをしたら、男前と呼ばれる類かもしれないと。

しかし、実際に汚れが取れ、きりりとした一文字の眉毛が露わになった顔を見て、想像以上の美貌だったことを知る。

「あんだ、汚れていて気づかなかったけど、整った顔をしているのね。特に蒼玉色のその瞳……とっても綺麗」

雪蓉は感嘆するように、男の顔をじっくり見つめた。男は気恥ずかしいのか、ふいと顔を背ける。

「俺は自分の顔が嫌いだ」

「どうして？ こんなに整っているのに」

「嫌いなものは嫌いなのだ」

男は投げやりに答えた。心底嫌がっている様子に、雪蓉はなんだか悲しくなった。

「そんなこと言ったら、親が悲しむわよ」

雪蓉の言葉に、男の顔が一瞬にして強張る。遠くを見つめて固まり、なにかを思い

出すかのように顔が青ざめる。

余計なことを言ってしまったと後悔して謝ろうとした雪蓉に、男は冷たい眼差しで口を開く。

「親に捨てられたくせに、よく言うな」

男は言ったあとすぐに、はつとした表情になり、気まずそうに視線を下げる。

「悪い、今は……」

弁解しようとする男に、雪蓉は軽く首を横に振って、気に留めていないことを伝える。

「たしかにここは子捨て山と呼ばれているけど、親を憎んでいる子なんていないわ。私が生まれた農村は、とても遠い場所にあるの。父は数日かけて、わざわざここまで私を連れてきた。ここに来るまでに全ての所持金を使い果たしてまで。売ることだったのできたのに、それをしなかった」

一度小さく息を吐いて、雪蓉は言葉が続ける。

「農村は貧しくて私を引き取ってくれる余裕のある人はいない。私を助けるためにはここしかない」と、父は考えたのだと思う。その後、父がどうなったかはわからないわ。生きているかもわからない。だから、恨んではいけないのよ。恨みようがないとも言え

るけど」

雪蓉の過去を聞いた男は、決まりが悪くなったのか口を閉ざした。

まったく気にしていないと言えは嘘になるが、男を咎める気持ちは一切湧かなかった。それよりも、男の内側に抱える心の傷のようなものに一瞬触れてしまったことに負い目を感じる。

男はなにかを考え込んでいる様子で黙り込んでいる。憂いのある男の横顔がやけに気になって仕方がなかった。

男が目覚ましてから三日目の朝。

驚異的な回復力によって、男はどんどん良くなっている。骨折していると思ったが、足を引きずりながらも歩いてはいるので、もしかしたら捻挫だったのかもしれない。それでも、足の怪我の完治にはまだ時間がかかりそうだ。

男のことを思えば、早く治って下山した方がいいとはわかっているが、まだ一緒にいられることに安堵する気持ちもある。

普段は子どもたちと仙くらいしか接する機会がないので、歳がわりと近そうな人と話すのは新鮮だからなのかもしれない。

「おはよう、ご飯持ってきてあげたわよ。感謝して敬いなさうい」

雪蓉は足で扉を開け、器用にまた足で扉を閉める。両手がお盆で塞がっているとはいえ、なんとも粗野な開け方に、男は呆れたような表情を浮かべる。

「感謝して敬えと言われると、途端にありがたみが失せるな」

「助けてあげたのに、あんた本当に偉そうね」

お互いの口の悪さを認識し、軽く受け流せるほど距離感は近くなった。

「今日の飯はなんだ？」

「焼き飯団おにぎりよ」

「それだけか。どんどん質素になっていくな」

「あんたね、タダ飯食べている分際にくせに文句言わないでくれる？ 米だって高いのよ」

雪蓉が押しつけるように口の前に焼き飯団おにぎりを突き出すと、男は素直にそのまま一口頬張った。

「なんだ、この味は」

男は雪蓉から焼き飯団おにぎりを奪うようにして持つと、夢中になってかぶりつく。

「口の中で広がる香ばしい醤油の味わい。ホロリとほどける米の旨味。三食三晩これ

でもいいぞ。一生これだけしか食えなくても後悔はない」

「また回りくどい褒め方ね。ま、気に入ってくれたみたいで良かった」

雪蓉は、男が自分の作った料理を美味おいしそうに食べてくれることが嬉しかった。

夢中で食べる男の顔は、どんな褒め言葉やお礼よりも雪蓉の心を満たす。

目を細めて微笑みながら眺める雪蓉の視線に気がついた男は、なぜか耳まで赤くなり、目を泳がせた。

「さすがにこれだけじゃかわいそうだから、これもあげる」

雪蓉は懐ふところから袋を取り出し、中からあるものを一つ摘まみ上げた。半透明の輝く四角い個体は、まるで宝石のようだ。

「それは？」

「氷蓮糖ひょうれんとうっていうのよ。子どもたちの大好物なの」

そう言つて、雪蓉は半ば強引に男の口に氷蓮糖を押し入れた。氷蓮糖とは、蜂蜜と海藻を煮固め、紅花や蝶豆ちゅうまめの煎汁せんじゅうで淡く色づけた菓子だ。表面は霜をまとったように結晶化し、かすかな蓮はすの香が涼やかに漂うことから、その名がついた。

「お、おい！」

有無を言わず口に入れられた氷蓮糖ひょうれんとうを、男は仕方ないと言いたげにゆっくりと

咀嚼する。シャリシャリと小気味のいい音がした。

次第に呆けたように味わう様子の男を見て、雪蓉は不思議そうに顔を覗き込む。

「もしかして、甘いもの苦手だった？」

男は勢いよく首を横に振る。

「それなら……あ、わかった！ 美味しすぎて感動のあまり言葉が出ないのね」

雪蓉の指摘に、男から否定する言葉は出ず、黙ったままだ。世の中にこんなに美味い食べ物があったのかと衝撃を受けている様子だった。

「あんたって甘えん坊だったのね」

不愉快極まりないことを言われたのか、男は怪訝な顔で雪蓉を睨みつける。

「甘えん坊？ もしかして甘党と言いたかったのか？」

「ああ、そうそう、それ！」

「二度と間違えるな」

本気で怒っている男に対して、雪蓉は気にする様子もなく話題を変えた。

「そういえば、長袍と下衣を持ってきたの。仙婆が着なくなつたものを継ぎはぎして作つたものだから、見た目はあれだけど……今の汚れた衣よりはまだいいでしょ」

謙遜ではなく、本当に見た目は酷かった。布の色がおかしなところで変わっている

し、そもそも布生地も違う。けれど、血がべつとりと固まつた服よりはましだろう。

しかし、男は少し顔を逸らして小さく息を吐く。

「ちよつと、こつそりため息吐かないでくれる？」

「着替えるから、一旦外に出るか、後ろを向いていてくれないか。俺の裸が見たいと言うなら止めないが」

「ため息の件、思いつきり無視したわね。まあいいわ。あんたの裸なんか見たくもないから外に出ている」

外に出ると朝靄がまだ残っており、雪蓉は肌寒さに腕をさすった。

小さな巫女たちはまだ寝ているだろう。戻ってから彼女たちの朝食の支度をしなければいけない。男の世話をしていることにより日々の負担が増えたし、慣れない裁縫で寝不足だが、不思議と心は晴れやかだった。

「終わったぞ」

男から声がかかったので、扉を開き中へと入る。

ようやくまともな身なりとなつて佇んでいる男を見て、雪蓉は目を見開いた。

「驚いた。精悍っていうか気品があるというか、農民の雰囲気ではないわね。あんた、一体何者？」

雪蓉の問いに、男は目を逸らす。

「そういえば、あんたの名前聞いてなかったわね。私は、潘雪蓉」

明らかに微笑んで、雪蓉は男の返答を待った。すぐに別れることになるのだから、名前を聞く必要もないと思っていたけれど、せっかく生死を心配するほど看病した相手なのだから、思い出として知っておくのも悪くないだろう。

「忘れた」

「えっ！」

まさかの返答に、雪蓉はうろたえる。

「頭でも打ったのかしら。まともそうに見えたけど。いや、そうでもないわね。図々しい生意気だし……たしかに変ね、変だわ」

顎に手を当てた雪蓉は、妙に納得した様子で、本人を前にとんでもなく失礼なことを口走る。

男は不服そうに眉を寄せてその言葉を聞いていたが、ふいに真面目な顔になった。

「雪蓉」

初めて名を呼ばれたことに驚きながらも、雪蓉は男を見つめた。

「礼は、必ずする」

「なによ、改まって。別にいいわよ、礼なんて。それより、自分の名前もわからないのにどうやってお礼する気よ」

黙り込む男に、雪蓉は快活に笑う。

「じゃあまたね、ゆっくり休むのよ」

本当はまだ少しだけ男の側にいたかったけれど、小さな巫女たちの世話もあるので、そうもいかない。

後ろ髪引かれる思いで納屋から出ようとすると、男が真剣な眼差しで雪蓉を見ていることに気がついた。

妙に胸がざわめくと思いつつ、雪蓉は扉を閉める。あまりにも熱のこもった男の瞳が脳裏から離れない。

(どうしたのかしら、私)

雪蓉の胸の動悸は、その後しばらく落ち着かなかった。

男を納屋で匿うようになってから一週間が経過した。

その日はすっかり太陽が沈むと、屋舎を叩きつけるような風が吹きすさんだ。木々や草は海の大波のように躍り上がり、強風が全てを呑み込むようにざわめく。

そんな中、風の音を怖がる小さな巫女たちを雪蓉が寝かしつけて、男の食事を作っている時だった。

突然扉が開いた音がしたので、風で扉が壊れたかと思って振り返ると、そこにいたのは仙だった。

「なにをしておる」

小さな巫女たちとたいして変わらない背丈の仙は、訝しげに雪蓉を見上げて言った。男のことがばれたのかと内心慌てた雪蓉だったが、平静を装って笑顔で答える。

「明日の朝ご飯の下ごしらえをしていたの。それに、少しお腹が空いたから夜食もね仙婆も食べる？」

「いや、いらん。それよりも、今夜は戸締りを厳重にしてさつさと寝た方がいい。ここ最近、動物たちが荒れておる。狼が襲撃してくるやもしれん」

「狼ですって？」

雪蓉は手を止めて、信じられないといった面持ちで仙を見た。

狼の襲撃は、不吉の前触れであると怖れられている。狼の群れは集落に住む人間たちを皆殺しにできるほどの力を持っているが、彼らはめったなことでは人間を襲わないし、この山には饗餐がいるのでそもそも野性動物は近寄ってこない。

「饗餐もここ最近落ち着かない。不純な気が山に入り込んでいるのかもしれん。夜、寝たあとは、どんなことがあっても外に出るでないぞ」

雪蓉は背中が粟^{あだ}立つのを感じた。

この土地が男子禁制なのには理由がある。霊獣を鎮める場所は清浄であらねばならないが、男性の気は荒々しく、周囲を汚すと考えられている。未婚の巫女しか饗餐山にいられないことから、鎮めの土地に穢れはご法度なのだ。

雪蓉は必死に心の乱れを抑えつけ、仙に答える。

「わかったわ。気をつける」

雪蓉の返事に仙は軽く頷くと、厨房を出て行った。

部屋で眠る小さな巫女たちのことも心配だが、納屋にいる男の方が危険度は高い。ここは頑丈な造りだから心配なもの、納屋は脆弱で、狼が本気を出せばすぐに破壊できるだろう。

しかも今夜は、嵐のような暴風が吹き荒れている。納屋の屋根がめくれ、いつ壁が吹き飛んでもおかしくない。

それに、男はまだ歩くことすらままならない。襲われたら逃げることもできないだろう。

雪蓉は急いで男の食事作りを再開した。終わると、大きなお盆を片方の手で器用に支え、もう片方の腕には提灯の取っ手を通し、あるものを持って納屋へと急いだ。

「ごめんね、遅れちゃって」

いつものように足で扉を開けて納屋に入った雪蓉は、息を切らしながら暗闇に向かつて声をかける。

提灯を大きく左右に振り、明かりに照らされた男の姿を見つけ、「いた、いた」と微笑んだ。床に提灯を置くと、暗い納屋を丸い光が照らし出す。

夕飯、というよりも、もはや夜食の時分だが、男は文句も言わずに与えられた食事を口にする。皿にこんもりと盛られたのは焼飯だ。胡麻油とにんにくと葱の香ばしい匂いが香る。シャキシャキと歯切れよく噛む音が聞こえるのは青菜で、満足そうに食べる男の顔を見ると心が満たされる。

あつという間に平らげた男は、始終外の様子を気にしている雪蓉に声をかける。

「さつきからどうした。それに、手に持っている物はなんだ」

「これ？ 平低鍋よ」

雪蓉は得意気に、狼対策として持ってきた平低鍋を掲げた。

「それくらい知っている。なぜここに平低鍋を持ってきたのかと聞いている」

「狼が襲撃しに来るかもしれないのよ。武器になりそうなものといったら、これくらいしなくて」

「狼だと？ なぜ狼がここへ……ああ、俺のせいかな」

男はすぐに納得した様子で頷く。

「早くここを出なくてはいけないな」

「でも、まだうまく歩けないのに山を下りるなんて、それこそ自殺行為よ」

「用を足しに納屋から出ることくらいはできる」

「その間に狼に襲われたら？ 山を下りる時は一緒に行くわ」

男は不思議なものを見るように、まじまじと雪蓉の顔を見た。

「自分の危険を顧みず、俺を助けようとしているのか？」

「せっかく助けたのに死なれては、後味が悪いじゃない」

「そもそも、どうして俺を助けた」

「人を助けるのに、理由なんていらないうしよ」

雪蓉の言葉に、男は目を見開いて驚いた。

「さすが巫女は尊い志を持っている。いや、巫女だからではない。お前だからか」

男は穏やかな眼差しで囁くように零した。意味ありげに見つめる瞳はあまりにも

魅惑的だ。

その時だった。大きな風が吹き、轟音と共に納屋が揺れる。それと同時に、不穏な気配を感じて、雪蓉は身震いした。

納屋の外から獣の足音や息遣いが聞こえ、じわじわと忍び寄ってくる。いつの間にか、見えない糸で絡まれたように密かに危険が迫っていたのだ。

雪蓉は平低鍋を片手に、扉を見据えたまま男を自分の背の後ろに隠した。

雪蓉の行動に、男は感心したように呟く。

「お前は、息を吸うように誰かを守るのだな」

雪蓉は男の言葉に反応する余裕もなく、扉を睨み続けている。

「嫌な予感がするわ」

「ああ、もうすでに囲まれている」

男がやけに悠長に構えているのはなぜだろうか。いかに怪力の雪蓉といえど、狼相手に勝てる算段はない。このままだと、二人一緒に死んでしまう。

（この人だけでも逃がすことはできないかしら。いいえ、自由に動けないのに無理よ。私が囨になったとしても、一人では逃げられない。この場で狼を倒すしか方法はないわ）

ふと気づけば、納屋の外からたくさんの獣の足音が聞こえる。狼は一匹だけでも脅威なのに、群れと対峙するなど不可能だ。

体当たりする大きな音がした直後、扉が開いた。そもそも納屋の扉には鍵がなく、あつという間に突破されてしまった。

暗闇に浮かぶ狼の瞳が光る。黒い剛毛に、垂れた大きな尾。納屋の中から見えるだけでなく、外には十匹近くの狼がいるようだった。

その中でも一際大きく威厳のある狼が、ゆっくりと中に入ってきた。額には稲妻のような傷がある。まるで熊ほどの大きさのある体躯で、この狼が大将であることが一目瞭然でわかった。

男を背中中隠しながらも、平低鍋を持つ雪蓉の手は震えている。

（しっかりしなさい。今、この人を守るのは私しかないのよ）

自分に言い聞かせ、決意を固める。

そもそも、雪蓉が男を饕餮山に匿ってしまったのがいけないのだ。狼を倒してその責任を取らなければいけない。たとえ、ここで死のうとも。

そんなことを考えていると、後ろで座っていた男がおもむるに立ち上がった。

「その平低鍋をよこせ」

「駄目よ、まともに歩けないあなたになにができるというの？」

しかし、しっかり柄を握っていたにもかかわらず、ひょいと簡単に男に平低鍋を奪われた。

「お前が俺を守るのではない。俺がお前を守るんだ」

足を引きずりながら雪蓉の前に立った男は、不敵な笑顔で狼と相對する。

男から放たれる威厳と貫禄は、狼の大将をも上回る圧倒的なものだった。絶対的自信に満ちた威容に、思わず平低鍋を取り返すことも忘れて見惚れてしまう。

大将と思われる狼が男に向かって飛びかかる。獠猛な口先から鋭利な牙が光った。

男は体がかがめ、飛び込んできた狼の顎に平低鍋の柄を突き上げた。狼は甲高く一鳴きすると、大きな体ごと納屋の天井に叩きつけられた。そしてそのまま地面に落ちる。

床に倒れ込み、絶命しているように見えた狼の大将だったが、仲間が心配そうに囲んで鼻先を押しつけると、目を開けてゆっくりと起き上がった。

恨めしそうな目で狼は男を見つめる。しばらく互いに見つめ合うと、狼は踵を返して納屋から出て行った。子分たちも大将のあとを追う。

狼が去ると、風が猛烈な勢いで納屋を揺らした。まるで竜巻のような突風が右往左

往している。

男は足を引きずりながらも扉を塞ぐが、狼に突進された衝撃で上手く閉まらない。壊れた扉の取っ手に平低鍋の柄を差し込み、無理やり扉を閉めた。

外の風は相変わらずうるさかったが、ひとまず平穩が訪れる。

男が膝をつき、呆氣に取られて座り込む雪蓉の肩をさする。

「怖かっただろう、大丈夫か？」

雪蓉は我に返った途端に恥ずかしくなって、顔を背けた。

「大丈夫よ！ ほんの少し、驚いただけ」

守ってもらった経験などなかったので、動揺していた。男性との関わりもほとんどなかったし、これまで雪蓉より強い男性なんて見たこともなかった。村の若頭が求婚に来て追い返した時も、雪蓉の方が強かったくらいだ。

だからこそ、生まれて初めて女性扱いされたことに戸惑ってしまう。

「あいつは俺を認めた。もう狼は来ないから安心しろ」

男は雪蓉の頭をなでる。

顔から火が出るように真っ赤になっているのが自分でもわかり、雪蓉は両手で顔を覆って俯いた。こんな顔を見られては、雪蓉が男のことを意識しているように思わ

れるではないか。守ってもらった経験が初めてで、自分がかawaii女性になってしまったみたいで気恥ずかしかったただけだ。

「泣いているのか？」

男が心配そうに雪蓉の顔を覗き込んでくるので、余計に顔が赤くなる。

「違うわ。納屋の扉が壊れてしまったことを嘆いているのよ」

「ああ、それはすまなかった」

自分が壊したわけではないにもかかわらず、男は申し訳なさそうに平低鍋の柄がはまった扉を見つめる。

もちろん、雪蓉は扉が壊れてしまったから落ち込んでいるわけではない。

「しかし、平低鍋フライパンというのは万能だな。調理にも使えるし、狼を撃退するにも役立つたし、今は門の代わりにもなっている」

男の飄々とした物言いに、雪蓉は「なにを言っているのよ」と呆れながらも、狼の襲撃という大変な目に遭っても泰然とした様子に男らしさを感じる。

（もう、どうしたっていうのよ、私！）

雪蓉は顔を覆っていた両手を離し、空になった皿が載ったお盆と提灯ちようちんを持って立ち上がった。

「帰るから、扉を開けるわよ」

せっかく閉まっていた扉から平低鍋フライパンを引っかくと、扉が今にも壊れて吹き飛んでいきそうになる。外はまだ強い風が吹いているのだ。

「狼はもう来ないが、風は強い。ここで夜を明かしては？」

男の提案に、雪蓉は耳まで真っ赤になりながら大きな声で答える。

「走ればすぐだから大丈夫よ！ それと、ええと……。あ、ありがとう。それじゃ！」

雪蓉は男の顔を見ずにおざなりに礼を言うのと、平低鍋フライパンを置いて一気に走り出した。風に吹かれながらも雪蓉は勢いよく走り、あつという間に家屋に着いた。

入る前に納屋を見ると、男は納屋の外から雪蓉を見守っていたらしく、目が合った。雪蓉は逃げるように家屋に入る。暴れるような胸の鼓動が、収まってくれる気配はまったくなかった。

納屋の扉が壊れてしまったので、別の場所に男を隠さなくてはいけないかと思いついて悩んでいたが、それは杞憂に終わった。

なぜなら昨晩の猛烈な風の影響で、至るところで建物が破損しており、その修復に朝からてんやわんやだったからだ。納屋の扉が不自然に曲がっていても、不思議に

思う者はいなかった。

朝ご飯を届けに行けないほど忙しく、昼はなんとか飯団おにぎりを届けることができたが、納屋の前に置いてきたので男の顔を見ることはできなかった。

というのも、仙に怪しまれているのか、常に視線を感じるのだ。日中は目立った動きはせず、皆が寝静まるのをじっと待っていた。

そうして夜も更け、すっかり静まり返った時分に雪蓉は納屋に赴いた。

扉の鍵は補強されていて、平低鍋ひらひなは必要なくなったのか、地面に置かれていた。

「凄いわね、道具もなしにどうやったの？」

「朝から巫女たちが修復に勤しんでいただろう。その道具を少しの間、拝借した」

「納屋から出たの？ 仙婆に見つかったら大変だわ！」

「大丈夫だ。そんなへまはしない」

男はまだ足を引きずってはいるが、随分良くなっているようだ。別れの時は近いのかも知れない。

「仙婆に怪しまれているから、夜中に厨房で料理をすることができなかったの。飯団おにぎりばかりでごめんなさい」

笹の葉にくるまれた飯団おにぎりを渡すと、男は嬉しそうにそれを受け取った。

「まったく問題ない」

昼と同じ飯団おにぎりなのに満足そうに食べる男を見て、いつもあまり良い物を食べていなかったのではないかと心配になる。

自分の名前を忘れてしまったこの男は、この先どうやって暮らしていくのだろう。

働き先のあてはあるのだろうか。

夢中まどろみで飯団おにぎりを頬張る男の姿を見つめながら、雪蓉はつい男の身の上を案じてしまう。

「俺のことを今、かわいそうだと思って見ていただろう」

食べ終わると、男は心底不服だと言わんばかりの顔で眉を寄せる。

「ええと、そんなことはないけれど……」

雪蓉は男から視線を外し、目を泳がせた。

今まさに、そう思っていたところだったので決まりが悪い。

男はこれみよがしに大きく嘆息したあと、やけに真剣な表情で雪蓉を見つめる。

「雪蓉、お前の望みはなんだ」

「なによ、急に」

「いいから答えろ」

男が真面目に聞くので、雪蓉も真面目に考えてみる。

「そうね、私の望みはただ一つよ。食を極め仙となり、この地を守る。身よりのない子どもたちを預かって、心と体を癒し、生きる術を教えて自立を見届ける。私は死ぬまでこの土地を離れない。だから結婚もしない」

予想しなかった答えだったのか、男は驚いていた。

「仙は駄目だ」

勢いよく否定され、雪蓉は面食らう。

「どうして」

「どうしてと言われても……」

男は気まずそうに視線を外した。

雪蓉は不思議に思ったが、それよりも頭の中に浮かんできた将来の自分の姿が気になる。どんなにかたちになるその夢をうっとりとする。

「仙の術は、その道を極めれば得ることができると言うわ。仙婆のように強い力はないけど、私の作った料理には不思議な力が宿るの。きつと、毎日饗養のために料理を作って、仙婆の力を見ているからだわ。ここで修行を積めば、いつか必ず——」

雪蓉はここでの生活が気に入っていた。料理を作ることも好きだし、自分よりも小さい子どもたちの世話をすることも好きだ。だからずっとここにいたい。そして夢を

叶えるのだ。そのためにも、男にうつつを抜かしている暇はないと自分に言い聞かせる。

「仙にならずとも幸せになる方法を知っている」

「え？」

男は真っ直ぐに雪蓉を見つめて続ける。

「後宮の妃となれば、美味いものは食べ放題で贅沢し放題。皇帝からの寵を得られれば、いくら低い身分であろうとも誰も齒向かえず、立場は安泰。どうだ、悪い話ではないだろう？」

男がなにを言い出すかと身構えていた雪蓉は、大きく口を開けて笑った。

「あはははは！ 後宮の妃？ なに馬鹿なことを言っているの、頭おかしいんじゃない？ ……ああ、ごめん、頭をぶつけていたのよね、冗談にならないわ」

雪蓉は笑ってしまった自分を反省する。

男は一瞬むっとしたようだが、すぐに真剣な表情に切り替えて近寄ってきた。

急に距離が近くなり、雪蓉は体を固くした。男の雰囲気が変わり、妙な圧力を感じたからだ。さらに男は雪蓉よりも頭一つ分大きく、ふいに美丈夫であることを意識してたじろいでしまう。